

金融経済教育と社会保障教育と

国際医療福祉大学大学院博士課程修了生 松田美恵子

私にとって、大変感慨深いご講義でした。

私事で恐縮ですが、私が東京都に入都し、都立病院勤務になった年に老人保健法が成立しました。無償化は終わり、会計窓口に自己負担を払う長蛇の列ができるのを見て、時代の変化を感じました。

それから40余年、日本の福祉は、一人一人に寄り添い、当事者視点となり、個人責任から社会モデルへ転換し、社会的包摂を進め・・・というように深化し、振り返ってみると驚くばかりです。

伊原様を始めとした厚労省の方々の熱意と改革の賜物と思います。

私も、おこがましくも、後輩に、“福祉ってクリエイティブな仕事だよ”と言っていたくらいです。

質問タイムに申し上げた社会保障教育について、僭越ながら補足させていただきます。

東京都を定年退職後、非常勤講師として、大学学部生に、社会福祉概論の講義をさせていただいています。

この4月に、「最近の社会保障関連のニュース記事を新聞やネットから任意に一つ選んで、簡単なコメントを書く」という課題を出したところ、“年収の壁”が話題になっていた時期でもあり、社会保険や消費税に関するニュース記事を取り上げる学生が多くいました。

年金改正法案関連の記事を選んだ学生は、自分の祖父母や親の話を聞いて、年金が減ると困るだろう、と思いつつ、年金には、若い世代の負担を増やさない仕組みがあることを、知ったとのことでした。

消費税減税に関する記事を読んだ学生では、消費税が社会保障の財源になっていることを知り、減らせばよいというものでもない、と書いた人もいました。

きちんと解説してある記事を読んだ学生は、複眼的な視点を持ち、考える機会を得たように感じました。

(SNSやYoutubeからではなく、インターネットでも、ニュース記事を取るように、と指定したので、比較的フラットでまとまった記事を読んだ学生が多かったものと思います。)

最近の学生さんは、確かに、結構、福祉体験を持っています。

ボランティア活動をしていたり、親が介護事業所で働いていたり、自分が保育所や学童ク

ラブに通っていた経験があり、また、ひとり親家庭で育ち奨学金で勉強している学生さんなど、昭和育ちの私には意外なほどで、まさに、福祉の普遍化の反映と感じます。

むしろ、それらの経験をつないで、社会保障や福祉の大きな仕組みにつなげる、理論の裏付けというか、教育体系の方が、不足しているのでは、とを感じるようになりました。（教育現場の先生方が作った教材の中には、そのようなものがあります。）

学生さんは、アルバイト経験もあるし、就職後の生活設計に関心が高いので、給与明細の説明をすると、関心を持って聞きます。保険料を支払う（天引きされる）ことで、医療保険や年金に加入することを初めて知る学生も多いです。

天引きされた保険料や税金は、自分の生活安全にも当然役立つが、それだけでなく、社会全体の安心や安全を支える仕組みの一部にもなっている、という両面の感覚を持ってもらうことが大事だろうと考えています。

金融経済教育だけでは、（各種教材を見ましたが）どうしても、前者の視点が強くなります。昨今の金融経済教育の隆盛をみるにつけ、後者の視点が忘れ去られるのでは、と心配になり、やっぱり、社会保障教育も並行してやらないと・・・というのが率直な気持ちです。

年金の説明をすると、どうしても、賦課方式→少子高齢化→年金財政は持つのか？という流れになり、マクロ経済スライドのような複雑な話に入ります。世代間対立をあおらないかと心配にもなります。

しかし、それらを恐れて、曖昧な話のままだにしておくと、その間隙をついて、都合のいいスローガンばかりが飛び交います。現実はどうどんどん進んで行くように見えます。

特に、若い人が最も影響を受けるので、良いことも悪いことも、まずは事実を伝える必要があるだろう、とも考えます。

教育現場では、いろいろな工夫がされておりますし、福祉の実践経験を持った方もたくさんいらっしゃいます。金融経済教育の向こうを張るわけではないのですが、やはり量で圧倒されそうな気がするので、社会保障教育でも様々な力を取りまとめ、推進する体制があっても良いのでは、と思う次第です。

本当は、両者をつなげる理論というか方法論ができて、推進体制も連携できれば、一番良いのですが…。そういう方向で役立つことを、自分自身もやらねば、と考えております。

勝手なことを長々と、失礼いたしました。